View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

報告

現代社会における思春期・青年期の若者における生と性の関係性支援とキャリア教育
―若草プロジェクト等の若者支援ネットおよび特別支援学校の養護教諭との連携から―

小保方　晶子*・堀江　まゆみ

研究実績の概要

思春期・青年期は自立を模索していく時期である。どう生きていくかを悩み、不適応に陥る子どももいる。一方で、性への関心が高まる時期であり、性トラブルも多い。著者らの聞き取り調査（石垣島、2017年）から、思春期の性に関わる出来事（たとえば10代の妊娠）が、その後の生き方の選択と直結している現状と、キャリア支援、そして関係性支援の必要性が明らかになった。本研究では、さらに思春期の性トラブルの基礎資料を得るために、性と生のトラブルの実態と、支援方法および課題を明らかにすることを目的とした。

（1）面接調査：特別支援学校、中学校、高校の教員６名（養護教諭４名）、NPO 施設に勤務する支援者１名の計７名に面接調査を行った。思春期の性トラブルには、個人の要因、環境など多様な要因が関わっており、時間軸の中で他の問題へと形を変えていく場合があることが明らかになった。性トラブルが関係性の中で問題の形を変えていくことがあるため、長期的な視点を持って関係性の支援を行う重要性が再確認された。また、トラブルが深刻な場合、キーパーソンが不在であり、キーパーソンを作り出すことから支援が開始されることが明らかになった。課題として、性トラブルが青年本人の問題に還元される場合もあり、教育や福祉と繋がりが途切れてしまうことがあった。また、思春期・青年期という発達時期を考慮した、横に並び立つことを意識した支援の必要性が語られる一方で、教員の場合、教育との兼ね合いや、他の教員との価値観の相違の葛藤も語られた。

（2）質問紙調査：特別支援学校教員、支援者に対して400部を配布し71部の返送があった。回収率が低いのは、性トラブルに焦点を当てたため、事例を経験していない支援者が含まれているためである。性トラブルで深刻化した事例、問題が深刻化せず解決した事例の各々について、衝動性の高さなどの個人の要因、保護者の協力などの家庭の要因、支援者の共通認識などの支援者側に関わる要因から検討した。問題が解決した事例と深刻化した事例で差がみられたものは、保護者に問題意識があったか、教員間で共通理解があったか、支援者側の指導のしやすさ、連携先、治療先、情報の存在の程度であった。問題が解決した事例でこれらの程度が高かった。面接調査においてもこれらがなかったことが支援の困難さとして示されており、保護者との連携、教員間の連携、連携先や情報の存在の重要性が示唆された。今後さらに分析を進めていく予定である。

＊子ども学部　発達臨床学科（～ 2019年３月31日）